

『いじめの未然防止』

1980年代に「校内暴力」という言葉が世間を賑わせた。教師と生徒との間で起こるのが校内暴力であった。新聞などの報道のほかに、当時のテレビドラマなどでも題材とされ、問題提起されていた。ところが昨今は、対教師暴力はほとんど騒がれることがなくなってきたが、いじめ問題がクローズアップされるようになってきた。

今日のいじめ問題では、殴る蹴るといった肉体的な暴力よりも、いやがらせ、暴言、無視などの精神的に圧迫を与えることが目立っている。いじめの舞台も学校内にとどまらずネット空間へと広がっている。

そもそもいじめとは、自分より弱い者に対して肉体的・精神的な暴力の矛先を向け、そのことによって優越感を覚えたり、ストレスを発散させたりするものと考えられてきた。しかし、昨今のいじめでは、いじめる側といじめられる側の間に固定的な優劣関係が見られなく、場合によっては、その立場が入れ替わることも多いという。かつてのいじめに見られた、仲間から排除し、人間関係を断ち切ってしまうということがなくて、いじめられる者を仲間へと囲い込み、その人間関係を保ち続けるという現象が見られるという。そして、いじめられていた者が、時としていじめる者ともなり得るという特徴があるようだ。

今日の思春期の頃の子どもたちは、友だちとの人間関係を重視するが故に、友だちから認められることに神経をすり減らしている。しかし、その人間関係を常に安定したものとして営むことは難しくなっている。それぞれが持つ価値観が多様化し、めまぐるしく変化し続けている。予想通りに友だちから認められることの見通しが困難な時代となっている。今日まで肯定的に受け入れられていたことが、明日もそうであるという保証はない。仲間の中で自分の居場所を安全に確保するために、常に周りからの反応を探ることに気を配る必要がある。四六時中スマホなどから目を離せないのは、いつ自分のことが囁かれているのかが気になってしかたないからかもしれない。

そのため、今の子どもたちは自分だけ突出することを避けようとする傾向があるという。とにかく目立たないようにしようということに徹するのだ。仲間集団の人間関係の均衡を乱す行為は危険なものとされている。無意識のうちに目立ってしまっていじめの標的にされた場合、その根拠は明確なものでなく、その理由が後付けされることが多いという。つまり、どこにでも、誰にでもいじめが起こり得るというのが今日のいじめであるという。

意図せずして、仲間内の秩序を乱しかねない行為をしてしまった子どもが途端に容赦ない攻撃を受け、孤立してしまう、この独りぼっちとなることに過度な恐怖感を抱いている。

だから、いじめはよくないとわかっていながら、一緒にいじめてしまうということが少なくないようだ。このようにストレス社会といわれる現代、子どもたちも日常生活で知らず知らずのうちにストレス症状が備わってしまっている。特に学校生活において、友人関係にまつわる嫌なできごと、人に負けたくないという過度の競争意識、勉強にまつわる嫌なできごとなどがストレス症状をもたらす要因となっている。その要因がもたらす「不機嫌怒りストレス」が高まるといじめに結びつきやすいといわれている。

学校生活の中で子どもたちが一番長く過ごすのは授業時間である。その授業が子どもたちのストレス症状を高める要因となっていないか、つまり、子どもたちの学力に対する不安、授業に参加できない活躍の場がないなどの不満が高められていないかということに学校は目を向ける必要がある。具体的には、すべての子どもが参加・活躍できるわかる授業づくりを着々と進めていくことがいじめの未然防止と深く関連する。

早期発見、早期対応の考えのもと、事後対応に力を尽くすことは当然やらねばならないことであるが、ネットいじめのような暴力を伴わなく目につきにくいものについては、わかってからではすでに手遅れといったことが多い。それを踏まえると、すべての子どもがいじめに巻き込まれる可能性があるものとしたいじめの未然防止の取組は最も有効な対策となる。

未然防止の基本は、子どもたちが安心・安全に学校生活を送ることができ、規律正しい態度で授業や行事に主体的に参加できる学校づくりを進めていくことから始まる。居場所づくりや絆づくりに重点をおき、互いを認め合える人間関係・学校風土を子どもたち自らづくりだせるようにすることが第一歩となる。

この未然防止の考え方は、従来から学校で取り組むべきこととして極めて当たり前のことであるが、これまで、この当たり前のことが果たして学校の中にしっかりと確立できていたのかということをふり返ってみた時、絵に描いた餅の状態という反省も多いのではないだろうか。

今こそ、日々の学校生活の改善から未然防止は始まることを根幹においた学校づくりが求められている。